IB DIPLOMA PROGRAMME
PROGRAMME DU DIPLÔME DU BI
PROGRAMA DEL DIPLOMA DEL BI

N05/1/A1JAP/SP1/JPN/TZ0/XX

88050151

JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Friday 18 November 2005 (afternoon)
Vendredi 18 novembre 2005 (après-midi)
Viernes 18 de noviembre de 2005 (tarde)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

次の１（a）の文章と（b）の詩のうち、どちらか一つを選んで解説を書きなさい。

１（a）

漂（ただよ）えど沈まず。

新しい作品の題をそうときめ、原稿用紙に書きつけたけれど、それきりである。一歩もさきへでられない。かれこれ一年にもなるのだが、一語も書きだせないでいる。毎日、ただ寝たり、起きたり、沈んだ大陸のことを書いた本を読んだり、推理小説を読んだりするだけである。正午すぎと夕方に駅前の大衆食堂へ食事にでかけるほかは、人にも会わず、パーティーにもでず、酒場にもいかない。会いにくる人もないし、電話もかかってこない。この一年間にしたことといえば部屋にこもって読んだり寝たり、寝たり読んだりで、原稿用紙は机にひろげたきりである。しばらくほっておくと薄く埃りがたまったり、日光に焼けて黄ばんだりするので、新しい紙に表題を書きなおし、古いのは丸めて捨て、それだけすると何か一仕事した気持になって、またよこになる。

書きたいことが何もないから書けないのではない。たくさんあるのに書けないのである。それは凝視するとこっそり遠ざかっていき、無視すると足音をしのばせて近寄ってくる。東に陽炎（かげろう）がゆらめき、西に逃げ水が輝いているといってもいい。近寄ってきた気配を感じて体を起し、机にむかうと、たったそれだけの動作なのにたちまち消えてしまい、私はしなやかに痺（しび）れてしまって、万年筆をとりあげることもできなくなる。新しいウォツカの栓を切るときとか、夜ふけに便器にすわったときなど、ふいに一言半句があらわれることがある。ついで衝動がやってくる。朝露のキラキラ輝やく広い草原がひろがるのを感じたり、港をめざして進んでいく上潮の深くてゆったりとしたうねりを感じたりする。それにそそのかされて一言半句はあッというまに根を伸ばし、幹をたて、枝をはびこらせて、一つの短篇ができあがるのである。観察しすぎるほど観察したいくつもの光景や顔が、さまざまの方角からかけよってきて、熟練の軽業師となり、あるものは動機となり、あるものは静機となり、前面で跳躍したり、背景をつくったりし、一瞬のうちに長篇ができあがることもある。酒瓶や、夜ふけや、トイレがなくても、デパートのタバコ売場、地下鉄の夕刊売場、通りすがりの女の眼、耳たぶをかすめる若い娘たちの低い笑声などにふれるだけで、それが起ることもあった。けれど、発生するたびにそれはちょっと眼を凝らして注視するうちにたちまち褪（あ）せたり、罅（ひび）が入ったり、粉末になったりし、じたばたするゆとりもなく遠ざかっていった。何度も何度もそうなるので、いまではそれは作品の私にたいする媚び、または挑発と感ずるようになり、すぐには呼応しないことにしている。贋物にかぎってキラキラするものである。

題がきまらないことには私は手も足もだせない。これまで、ときには、題にもたれかかることだけで書いたことも何度かあった。題はまぎれもなく作品そのもので、作者にとっては顔であり、遠い前方の山頂でもあるが、同時に巣でもある。毎夜そこから出発して彷徨にでかけ、夜明けにちょっとした荷物をおいて帰ってくる。しばしば荷物を背負ったままで帰ってくることもある。無慈悲な日光の射す時間を何とかして耐え、つぎの夜ふけになるとまた歩きだしにかかり、少しずつ距離をのばしていく。けれど、あるときには、題がブーメランのように感じられることもある。それは投手の手から飛んでいって獣に命中

し、その地点く獣といっしょに落ちるけれど、命中しなければ推力を更新して舞いもどる。うけそこねたら投手を獣として倒してしまうことがあるとされている。作品の序・破・急や、起・承・転・結のどこかで完全燃焼が作者に発生し、冷めた熱狂がやってきたら、そのときはブーメランが獣に命中したのだから、自身の武器に倒される恐怖や用心は忘れていいし、倒れた獣をめざしてかけだすだけでいいのである。つまり、作品の題を執筆中の作家が忘れてしまうようだと、そのときになって作品ははじめて作品になる。または、なりはじめる。

(開高健『花終る闇』一九九〇年)

〈注〉　開高健（一九三〇～一九八九）　小説家。代表作に『裸の王様』、新聞社特派員として体験したベトナム戦争を題材にした『輝ける闇』などがある。
陽炎（かげろう）　春や夏に、日光が照りつけて地面から立ちのぼる気。
逃げ水　草原などで、前方に水があるように見え、近づくと遠のいて見える現象。

――作品の題を決めても、すぐには書き出せないのは、なぜですか。
――ここで用いられている比喩表現は何を描くために用いられ、またこの文章の中でどのような効果を持っていますか。
――作品を書くこと、創造することは、開高にとって、どのようなことであると思いますか。

1(b)

弓

ちちとははからぼくはうまれた
さんざん不孝もしてきたけれど
ちかごろだんだんわかってきた
ぼくの短躯ははからもらった
右眼の曇りはちちからもらった
むすこの眼付きのわるさなら
ぼくがさずけたようなもの
あいしてくれたものたちを
無残に食いちらかしてきた
ぼくを食いちらかしてくれ
それが供養というものだ
けれどもそんなことよりも
ひかりながれる矢のような
いのちはどこからきたんだろう
ちちははよりももっとまえから
むすこらよりももっとさきへと
るいるいたる死をつらぬいてゆく
その矢はだれがつがえたのか
よる眼をとじてかんがえる
こんなまっくらやみのなか
ぼくをゆめみるものがある
あとかたもなくなったあと　らんらんと
ゆめみつづけるものがある

（池井昌樹「弓」、朝日新聞、二〇〇五年六月一七日）

（注）池井昌樹（一九五三～）詩人。代表作に『月下の一群』で、『池井昌樹詩集』などがある。
短躯（たんく）　背の低いこと。短身。
つがえる　二つのものを組み合わせる。弓の弦（つる）に矢をあてる。

――「弓」という題名は、どのような意味を持っていると思いますか。

――いのちを表すことばが多く用いられていますが、それらは作品に、どのような効果を与えていますか。

――この詩における表現の特徴について、あなたの考えるところを述べなさい。